

学会創立三十年によせて

三十回大会シンポジウム「口承文芸研究のこれから」の際に発言された会員の中から、学会創設の頃を知る方々よりコメントを頂戴しました。

これからの課題―昔話内部の研究を―

小澤 俊夫

創立三十周年記念大会のシンポジウムは、先細り学会という気分のなかで話が進められているように感じた。日本中の生活環境が激変し、伝承の語り手が姿を消しつつある現状は、昔話の生態学的研究にとっては確かに痛手であろう。だが、人間は、家庭、社会を形成して以来、語ることを聞くことをやめたことはない、という歴史を忘れてはならないと思う。それは人間にとって根源的な喜びであったことを思えば、研究としてなすべきことはいくらでもあるではないか。激変した、そして、しつとある現代社会での昔話の生態学的研究も、当然なされなければならない。しかし私は、現代でも、子どもは、話を聞くことに大きな喜びを感じていることに注目する。いわゆる現代の語り手たちは異口同音に言う、「子どもはなまの声で話を聞かせると、吸い込まれるように聞いてくれる」と。私自身も経験している。こんなに便利な機器が氾濫しているのに、なまの声で聞くことにそれほど惹かれるのは何故か。それ自体、大きな研究テーマではないか。従来、この方面は、教育学分野に任せていたと思う。だが、本当は、これこそ、昔話自身の生命力という観点から、昔話研究の重要な分野のはずだと思ふ。

この問題を突き詰めていけば、当然のことながら、昔話の表現方法、語り口の問題に行き着く。昔話の研究ではなく、昔

話の内部の研究に行き着くはずである。生態学に並べて言えば、昔話の生理学と言える。

この問題は、土地言葉で記録された昔話資料を再話するときに、具体的な問題として現れてくる。従来、昔話研究者はほとんど再話には手を触れてこなかった。それは、児童文学の一分野であるかのごとく、児童文学者たちによって行われてきた。昔話研究者のほうは、昔話の表現方法、語り口についてはほとんど研究してこなかったから発言のしようもないし、児童文学者のほうは、それについて研究することなく、自らの文芸的な好み、ないし児童文学観によって昔話を再話してきた。

その結果は、周知のごとく、非常に文芸化された、しかも、個々の児童文学者の好みにしたがって文芸化された再話が、「日本の昔話」あるいは「日本の民話」として国中に広まってしまったのである。具体的に言えば、柳田國男以来、全国の昔話研究者、調査者たちが営々として築き上げてきた日本昔話の莫大な資料と、現在の若者たち、そして日本の未来を背負う子どもたちの知る昔話との間には、大きな乖離が生じてしまっているのである。

本学会の創立総会後の懇親会の席で、初代会長関敬吾氏は、「近頃は昔話が大分ゆがめられている。これでいいのか」と指摘した。しかしその時点では、私を含めて、まだ誰もこの問題を真正面から取り上げることはできなかった。

三十歳になった本学会に、先細りなどしている暇はないはずである。

(おざわ・としお/小澤昔ばなし研究所所長)